

「教会の土台」

コリントの信徒への手紙(1) 3:1-13

今日は、七里教会の創立 34 年を記念する礼拝です。私たちのこの教会は、風間牧師が、瓦職人として 8 年間働きながら開拓伝道され、1987 年 7 月に伝道所として開設された教会です。それからの 34 年間の教会の歩みは、決して順風満帆というわけではありませんでした。少人数の会員で、さまざまな困難を乗り越えて、この会堂を立ち上げ、2 種教会を設立し、今日に至りました。

私は、所沢の教会に移る前、9 年間、浦和の教会におりましたので、同じ埼玉 1 区の教会として、教会設立式に列席したことを思い出します。その頃風間先生は、冷凍会社でアルバイトをしながら伝道牧会しておられて、普段 1 区の教師会にはお出になれませんでした。ある日の教師会の後、冷凍したエビのパックを大量に持って来られて、よかったら買ってくれと言われて、協力した覚えがあります。会社のノルマだったのでしょうか、本当に苦勞して伝道しておられる様子に頭の下がる思いがしました。

風間先生は 27 年間、この教会のために心血をそそがれ、体調を崩して隠退され、その後、太田光夫牧師を後任として迎えました。1 年後に病死されるという、悲しみを体験しました。1 年間の無牧の時を経て、小林則義牧師を迎えて、5 年間、順調に教会の諸活動が展開されましたが、お疲れになられたのでしょうか、この 3 月で辞任され、再び無牧の時を迎え今日に至っているわけです。この間、役員をはじめ、教会員のみなさんも色々にご苦勞されたことと思いますが、地区・教区の牧師や信徒の方々の祈りと支援に支えられて、今日、34 年目の創立記念日を迎えられることを、共に喜び感謝したいと思います。この創立記念日にあたって、私たちは改めて、「教会とは何か」ということについて、ご一緒に聖書から学んでみたいと思います。

「教会」というと私たちはまず、教会堂という建物や、組織、制度のようなものを思い浮かべるかもしれませんが、聖書で使われている「教会」という言葉は「エクレシア」というギリシャ語です。この言葉のもともとの意味は「呼び集められた者の集まり」という意味です。教会は「集まり」(群れ)なのです。しかし、その集まりは、自然に出来た集まりや、任意に自分たちの趣味や目的のために集まってできた群れではなく、呼び集められ「召された者の集まり」なのです。誰が呼び集めたのか？ 言うまでもなく、神さまです。「神さまによって召された者の集まり」。これが教会です。

イエスさまは、弟子たちをお召しになる時、「ペトロ」、「ヤコブ」、「ヨハネ」、「アンデレ」…と、一人一人の名前を呼んで、「わたしに従ってきなさい」と声をかけ、弟子とされました。彼らは、このように、主に招かれて、生涯主に従い、イエス・キリストを宣べ伝える者とされたのです。これが教会の原型だと言うことができます。

このようにして、主イエスの弟子として選ばれた者たちは、12 人でしたが、この 12 という数は、イスラエルの 12 部族を象徴しているのです。つまり、この弟子たちは、神によって選ばれた「新しい神の民」であったのです。教会は、この弟子たちの群れから始まったわけで、教会もまた、神によって召された「神の民」であり、この世に神の国を証しする群れなのです。

イエスさまは、弟子たちにこう言われました。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」(ヨハネ 15:16)と。この言葉は、教会について考える時に、とても大切なことを教えているように思います。私たちは色々なきっかけで、この教会に導かれ、連なっているわけですが、私たちが教会を選んだのではなく、主なる神さまが私たちを選び、招いて、「神の民」としてくださったということです。つまり、教会の主体は、私たちではなく、イエス・キリストであり、神さまなのです。

神さまはなぜ、私たちのような者を選ばれたのでしょうか。私たちは、特別に人より優れた能力や特別な力を持っているわけではありません。イスラエルの民は、多くの民の中で最も弱く最も小さな奴隷の民でした。イエスの弟子たちにしても、何のとりえもない「ただの人」たちでした。私たちにしてもそうです。神さまの選びは、一方的な神さまの愛と恵みによるものでした。神さまは、弱いものや無きに等しい者をあえて選ばれることによって、ご自身の愛と、力ある御業を現わされるのです。つまり、神さまは、選ばれた一人一人を通して、多くの実を結ぶことを期待しておられるのです。

イエスさまは、ヨハネ福音書の中で、教会を「ぶどうの木」に譬えて、「わたしはぶどうの木、あなた方はその枝である」(ヨハネ 15:5)と語り、「わたしにつながっていないさい。わたしにつながっていれば、豊かに実を結ぶ。わたしから離れては、あなた方は何もできず、枯れてしまう」と言われました。主に招かれた一人一人が、しっかりとキリストに結びつき、その命にあずかることによって、多くの実を結ぶことが期待されているのです。教会は、そういうキリストを中心とした交わり(共同体)なのです。

パウロは、この譬えをさらに展開させて、「教会はキリストの体であり、一人一人はその部分です」(コリント 1-12:27)と言われました。人間の体は、手や足や、目や耳や口などのように色々な部分から成り立っていますが、それらはみな同じ働きをしていないわけです。それぞれの部分が、みな異なった役割をもっていますが、皆一つにつながって統一した働きをしているわけです。すべての部分が体の中核である脳とつながっているからです。教会の頭(かしら)は、イエス・キリストなのです。体のすべての部分は、この頭につながって、この脳の指示に従って、統率の取れた働きをするのです。

「教会の成長」ということが、よく言われますが、教会の成長とは、単に教会の人数が増えて、教会が目に見える形で大きくなるということではありません。確かに、教会員の数が増え、経済的にも豊かになることは、望ましいことですが、体だけ大きくなって、その内面が整っていなければ、成長したとは言えません。教会の成長とは、一人一人がしっかりと頭なるキリストに結ばれ、イエス・キリストの御心に従って、一つになること。そして、そのことによって、あたかもキリストが生きて働いているように、生き生きと主のみ心を行うようになること。これが、教会が「キリストの体」として成長し、「良き実を結ぶ」ことなのです。

パウロが、このコリントの信徒への手紙の中で、切に願い、訴えていることは、どうしたら教会が、そのような「キリストの体」として成長し、キリストの良き実を結ぶようになるか、ということです。

コリントの教会は、パウロによって福音の種が蒔かれ、大きくなった教会でしたが、パウロが去った後、教会の中にさまざまな問題が起ったのです。それらの問題の解決

のために、パウロが心をこめて書いたのがこの手紙です。その様々な問題の中で、彼が最も心を痛めた問題は、教会内部の分派の問題でした。つまり、教会の指導者をめぐって、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」(1:12)と言い張って、互いに対立し争うということがあったのです。この「アポロ」というのは、パウロの後、コリントの教会を指導することになったアレクサンドリア出身の雄弁な教師です。「ケファ」とは、イエスの弟子であったペトロのことですが、当時エルサレム教会の中心的な使徒として、采配を振るっていたのです。コリントの教会の人たちは、それぞれ自分の気に入った指導者を絶対化して、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」と互いに言い争い、中にはそれに対抗して「わたしはキリストに」と言って互いに反目し合うような混乱を呈していたのです。その様子は、この手紙の1章にも記されていますが、1章13節で、パウロはかなり激しい語調で「キリストはいくつにも分けられてしまったのですか。パウロはあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか」と、畳みかけるように抗議しています。

パウロが必死になって主張したのは、教会の頭はイエス・キリストであって、自分たち使徒ではないということを示すためです。誰であれ、人間を絶対化することは、キリストを相対化することです。キリストを相対化することとは、教会がその中心を失ってバラバラになり、幹から離れたぶどうの枝のように、枯れてしまうこととなります。頭(かしら)であるキリストから離れた教会は、もはや「キリストの体」ではなくなってしまうのです。

この手紙の3章で、パウロはこうしたコリントの教会の現状を憂いて、こんなことで論争しているようでは、あなた方は未熟な「肉の人であり、ただの人として歩んでいることになる」(3:3)、と言い、私にしろアポロにしろ、あなたがたを信仰に導くために、神から遣わされた「仕えるものに過ぎない」(5節)と語っているのです。そのような流れの中で、6節の、よく知られている言葉を語ったのです。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させてくださったのは神です。ですから大切なのは、植える者でも水を注ぐものでもなく、成長させてくださる神です」。

教会を育て、成長させてくださるのは、神さまです。私は、長いこと牧師として教会に仕えてきましたが、その体験からしみじみと思うことは、自分のしたことは、種を蒔いたり、水を注ぐようなことでしかなかった。神さまが働いて、「万事を益となるようにしてくださった」ということです。成長させてくださるのは、神さまなのです。そのような意味で、9節の終わりで「あなた方は神の畑だ」と語ったのです。しかし、パウロは同時に、「神の建物なのです」とも語っています。これはどういう意味でしょうか。

パウロはここで、教会の基礎、教会の土台は何か、というもう一つの大事なことを強調しようとしているのです。建物を建てる時、何よりも大切なのは、土台です。外見がどんなに立派な建物でも、土台がしっかりしていないと、地震や、今どきのように長雨が続き大水があふれたりしたような時、建物全体が歪んだり水に流されたりしてしまいます。教会の土台は、言うまでもなく「イエス・キリスト」です。そのイエス・キリストを土台として、その上にしっかりと立つということが、教会が教会として成長す

るためには、何よりも大切なことなのです。

パウロは、コリントに伝道した時、何よりもそこに重点をおいて、基礎作りをしたというわけです。10節の「わたしは、神からいただいた恵みによって、熟練した建築士のように土台を据えました」とは、そういう意味です。熟練した建築士が、何よりもまず、土台を一番吟味するように、「イエス・キリストという土台を据えた」というわけです。「この土台を無視して、だれも他の土台を据えることは出来ません。この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる場合、おのおのの仕事は、明るみに出される」(11-12節)というのです。それぞれの業が、裁きの日に神さまによって試されるというのです。つまり、「イエス・キリスト」という土台の上に、私たちがどのような建物を建てていくのか、ということがこれからの課題だ、というのです。

先達たちが、築いてこられた基礎の上に、私たちがこれからどのような教会を築いていくのか、ということが34周年を迎えた私たちの課題なのです。一人一人がイエス・キリストという土台にしっかり立って、キリストによって互いに固く結ばれて、組み合わせられて、どんな地震にも、嵐にも、大雨にも揺らぐことのないような、また流されることのないような、堅固な教会を共に立ち上げていきたいものです。 アーメン